

隊。その間本隊は農業班、雑作業班、清掃、防空壕埋め等の作業をしていた。

私たちは討伐より帰ってからカンボジャ王城警備等に
従事。

昭和二十一年五月八日 内地帰還のため「米山丸（石炭運搬船）で西貢出航、帰途につく。

昭和二十一年五月二十二日 鹿兒島港上陸。同二十三
日召集解除。同二十五日帰郷。

苦勞と犠牲の多かった

ビルマの工兵連隊

兵庫県 藤井力 泉

―藤井さんは大正十二年九月生まれということですが、召集ですか、現役ですか、兵科はなにだったのですか。

私は十九年三月に、広島西部第七部隊の工兵隊（爆心地より北側の牛田町）へ召集されたのですが、現役よ

り一か月早かった。第二乙種で三か月の教育召集でした。

工兵の訓練は厳しい、爆薬で戦車への肉迫攻撃、キャタピラの下へ入れる。架橋、太田川の川原で爆破作業、漕舟は音戸の瀬戸の急流でやるが、目的地に着くには一キロ手前を目標にしないと目的地へ着かない。鉄舟、折疊舟で約一か月間、下手な者は水の垢取りで背中へ水をいれられる。

私は体力的には大変だったが、百姓だったので力はあると思われた。私の時は体の適性などあまり考えなかったのかな。

基礎訓練三か月、その間歩兵のやることは全部やり、その他工兵の訓練も、縄の結束だけで九とおりぐらいある。教育召集解除になって、引きつづいて臨時召集、五月末に久留米の工兵隊へ転属になった。久留米には肉弾三勇士の銅像があり、伝統的な連隊だったので、訓練は広島より辛かった。

約一か月ですぐ朝鮮の平壤へ行ったが、出発の時はどこへ行くのかわからなかった。玄海灘を渡ったが、もう

敵の潜水艦が来ていたのに幹部からの話もなく、兵隊はなにも知らされずその気配も感じなかった。

釜山からただちに平壤へ、着いたのは夜中で、練兵場で待機、夜が明けてはじめて平壤とわかった。そこで第四十九師団(狼兵団)が編成されていた(十九年)。日本全国の連隊の工兵隊から集めて新編成されたらしい(工兵第四九連隊・狼第一八七〇七部隊)。そのなかには朝鮮の人も若干いた。千二百人ぐらいで、約一か月、工兵隊は龍山だった。

釜山へぎやく戻り、三島高女が宿舎になり、毎日港へ船積みの使役に一週間ぐらい出た。それから六千屯ぐらいの貨物船に乗船したが、他の兵種もあり、関東軍の兵隊もいた。船のなかは蚕棚のようにしてあって、立って歩けない。聞いたところでは七千人ぐらい乗っていたとか。

釜山を七月に出発、唐津を通った時、はじめて南方へ行くことを知らされました。台湾沖からマニラへ寄港、二日間ぐらい。マニラ出発の出口のところで攻撃を受け引きかえした。夜が明けて仏印のカムラジ湾向けに出

港、そこで二三日停泊。

出港した時、数個船団があったが、出口で魚雷攻撃を受け自分の船がやられた。魚雷の航跡が白くみえた。三発来たのは覚えている。一発が機関部へ命中、船は停止、完全に沈むまで三時間ぐらいかかった。

私は船倉へはいれぬので甲板にいたが。魚雷攻撃の衝撃で海へ投げだされた人もいた。私達は折りたたみ舟艇を組立てる時間があり、それを降ろして乗った。おそらく工兵隊の者が多かったと思う。一番長く漂流した人は三〜四日間、その間、直射日光と潮焼けで体は火傷のような火ぶくれになる。

助けられてサイゴンに上陸、歩いて競馬場の宿舎にはいる。武器弾薬は船と一緒に沈んでしまったので、そこで被服や武器弾薬が支給された。船で死んだ人もずいぶんいたし、一か月ぐらいそこにいた。

—これからが、狼兵団のビルマでの戦闘にはいるわけですが、進攻でなく撤退のすけつとですから、悲劇の序曲が始まるのですね。

陸路タイ国へ歩いて、さらに泰緬鉄道沿いにビルマ

へ。ビルマへはいる前に鉄道建設の話等聞かされてしまった。その間襲撃があった。薪で走るので火の粉が散り、民家や山が焼けたが消す方法もなかったのだ。

工兵連隊全部で、暑いなか汽車に乗らないで雨でも日照りでも陸路を歩く。その間、マラリヤにかかり、私も四日熱で苦しみながら高熱で食べられない。全員マラリヤになったが、日射病やマラリヤでは死んだ人は記憶にない。

モールメンに着くのに一か月ぐらいかかり、そこで編成して補給も受けたが、爆撃はされたが陸戦はなかった。モールメンからラングーンは船で、ラングーンから汽車でメーカーテラへ。第十八師団(菊兵团)の応援に、途中、第五十三師団(安兵团)の人が京都弁で「疲れた」と言っていた。

マンガレーの飛行場を攻撃するため、その手前まで行ったが、その前に照明弾で物すごく明るくなって夜襲が出来ず、ぎゃくに襲撃され戦死者が多数出た。小隊長も負傷(陸軍士官学校出で張り切っていて、大腿部負傷)し、後方にさがって隊長不在になった。

それまでは戦闘はあまりなかったが、これからは撤退作戦で連隊がバラバラになった。ひどい時は分隊単位ぐらいになってしまいました。

インドー部落に着くまで高射砲隊と一緒にだったが、高射砲を置き去りにして行ってしまったので、一時、高射砲を引っ張って撤退した。

インドー等の部落で相当戦闘した。近くで敵と遭遇して銃撃戦、五十〜百メートルぐらいなので、敵を目前にしながら、その時は割と戦死者は少なかった。そこで夜になって、既設のし字型などの防空壕にはいった。英軍管轄だから戦闘は日中だけ、夜は敵は休むので、その間に日本軍は行動した。その時中隊長・灘尾中尉が連隊の指揮をしていたように記憶している。隊長は僧侶だった。戦死者の葬儀はこの人がお経をあげていた。

進攻より撤退の方がみじめ、それまでは菊兵团と同じ方向へ行ったと思うが、砲兵は道でなく山越しに撤退していった。

インドーの時に、日本軍は夜行動だった。私はその時、し字型壕の奥にいた。四十五屯の英戦車が壕のうえを

通ったが、材木がうえにあつたのでくずれなかつたのかも。その後、敵がうえに掛けてあつたトタンをはいでなかをうかがっていたが、さいわいみつからなかつた。その時、分隊十人のうち四人ぐらゐが残つただけだつたか。近いところで自動小銃でやられた悲鳴が聞こえるが、どうすることも出来ない。私の場合は敵が日本兵がないと思つて、またトタンをかぶせて行つてしまひました。幸運だつた。

—撤退とか、負け戦というのは悲惨なもので、一刻一刻が身をけずられる思いでしょう。

そこから本部までは直線距離で一キロぐらゐだつたか、敵が火をたいているので、敵のうしろの方をまわつて本部へ帰つて、戦友の岡崎と二人で報告した。隊長は「先導して行け」と命令されたので、命令だからしかたなく進んで行つたら照明弾を落され、「行動不能で帰隊した。その間いろいろな戦闘はあつたが、さきほどのトタンをはがされた時の方が弾の飛んでくる戦闘中よりつらかつた、と今でも思い出します。

それから後方にさがつて、大ゴム林で終戦となつた。

その時工兵連隊は連隊でまとまつた。それから武器の引き渡し、武装解除となつたわけです。そのため、小銃の菊の紋章をやすりでけずり引き渡した。私も一緒に行ったが、その時渡河するために筏をつくつたり、渡すなど作業をした。

つづいてラングーンへ転進した。終戦後は歩かされず汽車やトラックか、またどのくらいかかつたか、もう記憶がうすい。

ラングーンで労役に従事させられた。二十二年六月頃までだから、私は終戦後の方が長い。そこで病没した者もいた。私はさいわいに二年のうち、半年ぐらゐしか労役には出なかつた。他は炊事をやつた。

編成されたときは千二百人だつたが、病院船で二十人ぐらゐ帰つた。他の生存者は百八十人ぐらゐか、十五%ぐらゐしか生きて帰つてこなかつた。

工兵は歩兵よりさきに行く。橋をつくつて歩兵を渡し、その後それをくずして、また歩兵より前へ出て行く、架橋もする、爆破もする。結局、苦勞多くて犠牲者が多かつた。

私はラングーンから貨物船に乗ったが、コレラが発生してまたぎやく戻り、一か月ぐらい上陸したのち、シンガポールに寄港して復員した。私は最後まで補充なしの万年初年兵の伍長だった。

ビルマ戦倒れた友は撤退・救援戦闘

長崎県 吉 福 周 一

―撤退するビルマの部隊を救うために、二十年になつてから戦闘に参加したとのことですが、狼兵団で悲惨な経験をされたと思うのですか。

私は大正十二年四月生まれですが、昭和十九年三月、教育召集で朝鮮の第四十九師団歩兵第二十三部隊へ入隊したのです。その部隊は編成したばかりで、釜山―下関へいったが新設なので荷物が多く、積み降ろしに大部苦勞しました。軍馬も連れていかねばならぬというので。

八月になって小倉を出発したが、五島沖で船が故障して引き返し、福岡で下船、七、八日位で修理が終わった

ので、八月十五日お盆に博多を出帆、唐津や伊万里に寄港して五島灘を南下したが、魚雷情報があつて港へはいったら鹿児島の人々が錦江湾だといひよった。

沖繩を通過して台湾の高雄、基隆にもちよつと上陸した。その間、潜水艦が出るので陸地スレスレに南下した。高雄では、支那の飛行機が来て、空中戦をした。私は重機銃隊なので、船の船先で対空監視をしていた。パーシー海峡通過するあたりが一番危険と聞いていたが、一隻がやられた。

九月十八日にマニラに上陸したが、十九日には米軍レイト島上陸、はしりの大空襲があつた。輸送船等は避難したが全部やられたといひていた。二十八隻とか三十隻とかだから。マニラに一か月ぐらい待機して糧秣受領に行つたりしていた。

十月五日、久しぶりにマニラを出発だが、前の船がやられて装備を持たないので、我々は重機だけを持って船に乗った。各部隊は二つにわけて、一個師団ばかりでなく、中隊も二個小隊ごとにわけるとかして乗船した（一隻がやられても他の一隻が残れば、そのまゝ戦闘出来るよう